輸入青磁を副葬した中世墓

はじめに 今回の調査は西大寺南地区土地区画整理事業に係る発掘調査の一つです。調査地は西大寺旧境内の南東隅にあたり、これまでの隣接地の調査から、奈良時代の遺構が少ない場所と考えられていたが、当初の予測に反して、多くの遺構を見つけるとともに、奈良市内では初めての青磁と刀を副葬した中世墓が見つかりました。

遺跡の概要 検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱圍、井戸、及び平安時代末〜鎌倉時代初め頃の墓、満などです。

掘立柱建物は、2間 (4.2 m) × 3間 (7.2 m) の東西棟建物と、北と東に妻をもつ 2間 (3.6 m) × 2間 (5.4 m) 以上の南北棟建物です。

掘立柱圍は、東西埋めで最も長いものが 9 間 (18.5 m) 以上、南北埋めは 6 間 (13.8 m) 以上あります。

井戸は 3 つ見つかり、深さは 1.3 〜 1.7 m ありました。どれも柵板が取られており、西側の井戸の底にだけ、高さ 30 cm ほどの板が方形に廻らされているのを確認しました。井戸からは奈良時代の須恵器や壷や土師器類が出土しました。

中世墓は発掘区中央部の北側で見つかりました。南北約 1.5 m、東西約 0.8 m、深さ約 15 cm の側面長方形の土坑墓で、中国製青磁 5 点と鉄刀 2 本が副葬されていました。骨は残っておらず、棺の痕跡も見当たりませんでした。副葬された青磁は 12 世紀後半のもので、平安時代末〜鎌倉時代初め頃に埋葬されたものと考えられます。

このほか同時期の遺構として満や柱穴もいくつか見つかっています。明確な建物跡は認識できませんが、中世にはこの場所が集落地や耕作地として利用されていたと考えられます。
発見された中世墓 今回見つかった墓には遺体は残っていませんでしたか、出土遺物とその出土状態によってこれが墓であると判断できました。墓の中には、中国から輸入した青磁碗2つと青磁小皿3つが頃んで入れられており、その北側には塗りの粘土に入っていたとみられる長さ約45 cmと約30 cmの2本の鉄刀が並んでいました。青磁碗は鎌倉窯系、青磁小皿は伊万里窯系の製品で、腕には飛鳥文、小皿には梳点描文という独特の文様があらわれています。

被葬者についての説明が見つかりますが、輸入陶磁器や刀が納められているということは、墓地に埋葬できなかった一般庶民をやむなく葬ったということではあります。

このような土坑墓は11世紀中頃から建物群のそばで見られるようになります。通常単独で存在し、多くても3つまでです。中世後期以後発達する共同墓地とは異なり、建物を中心とした屋敷地内に納められていることから、このような墓を「屋敷墓」と呼んで、その土地の所有者の世襲制に関

ーする重要な葬送行為として意義付ける考えもあります。

この墓に伴う建物跡は明確ではありませんが、この地に屋敷を構え耕作地を持つ地位にあった人物の墓である可能性が高いと考えられます。